
窓と傘。

雛栗　くり子

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

窓と傘。

【Nコード】

N7774L

【作者名】

雛栗 くり子

【あらすじ】

どうしてここに留まっているのか。そんな疑問を持ち始めた妻「美代子」。外の世界で会話するのは近所さんとその犬。行き付けのパン屋さん、友人。時々昔の同僚。そして「恋人」。浮気という言葉とは裏腹にゆっくりと穏やかに流れていく日々。そんな恋愛物語です。

毎日の始め方。（前書き）

はじめまして。くり子です。今回初めて小説をかきます。至らない点が多いと思いますが目を通してくださる方がいらしてくれたら嬉しいです。

予定としては一話一話短く、エッセイの様に読みやすい文章にできたらと思っています。今回はプロローグの様なもので更に短めです。

宜しくお願いします。

毎日の始め方。

「しょうゆ。」

これが夫が最初に口にする言葉だ。リビングの食卓に座り、広げた新聞を見つめながら。小さい頃から朝食は目玉焼きだった。母親の好物なのだ。「好物だった」といった方が正しいのかもしれない。別に私はそこまで好きではないけれど、なんとなく起きてすぐに目玉焼き以外の物を口にとすると違和感があるのだ。夫は文句を言ったことが無い。そして、必ずしょうゆをかける。

「自分で取れば良いじゃない。」

私は自分が既に汚してしまった真つ白なお皿を洗っていた。新聞は未だに夫の顔を隠す様に広がったままで、彼は一言も発しない。どうやら自ら手を伸ばすつもりは無い様だ。私はため息を着くと泡の付いた手をさつと水に潜らせてから蛇口を閉めた。「きゅっ」という軽快な音がした。

「はい。」

うんざりした声と共にしょうゆを取る。夫の目前にある長方形のテーブルに佇んでいるしょうゆを。そして皿の脇に置いた。その時、少し屈む際にかつて恋人であった相手の顔を覗いてみた。中年ですっかりふくよかになった顔を。

夫が仕事に出掛けた。私は鼻歌を歌いながら洗濯物を干す。夫が「夫」となる前、私を「美代子」と本名ではなく「みよ」と省略して呼んでいた。あの頃は結婚するのが待ち遠しかった。みよを卒業する事が。そして今、私は結婚していてみよを卒業している。でも、今ではみよでなければ憧れの「おまえ」でも「母さん」でもない。そんな事を思いながら、私は鼻歌を歌った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7774/>

窓と傘。

2010年10月9日20時46分発行